

会員寄稿

国際競技レベルの選手育成を見据えた 屋内型スケートパークの整備計画

株式会社新日本コンサルタント

設計計画本部 社会基盤部 西田 宏
石村 尚太

1. はじめに

スケートボードやインラインスケートを行うための場である「スケートパーク」は、近年増加傾向にある。従来は、民間施設や公共の未利用スペースを活用して整備されていたが、最近では公共施設として整備を進めることも増えてきている。

おりしも、スケートボードは2020年に開催される東京オリンピックの正式種目にも選定され、競技スポーツとしても注目を集めているところである。

このような情勢を背景に、新潟県村上市では、エクストリームスポーツの振興と選手の育成を図るべく、スケートパークの整備にいち早く着目した。

ここでは、村上市におけるスケートパーク整備の基本計画の内容について述べ、その特徴を紹介する。

2. 整備方針

整備方針としては、以下の3点を掲げた。

- ①村上市の特性を活かす
- ②競技選手を育てる
- ③専門性を確保しつつ多目的に利用できる

①は、村上市の地域性や独自性を表現した施設とすることである。具体的には、村上市の特徴的な産業である林業に注目し、建築の主たる材料に村上市産木材を用いるものとした。建築の外観で「林業のまち」であることをPRするものである。

また、屋内型の施設は全国でも数が少なく、冬期に降雪のある村上市においては、屋外型では困難な通年利用が可能となり、近隣都市から

の集客も期待できる施設であった。

②は、オリンピックレベルの選手を育成することで日本におけるスケートボードの「聖地」とすることを目指すものである。構想策定に当たっては地元のスケートボード協会と連携し、意見・要望を取り入れて施設の高度化を図るとともに、事業に関わってもらうことで村上市全体としてスケートボード振興の気運の醸成を図ることができた。

③は一見、②と相反するものを感じられるが、スケートボードに触れるきっかけを作り、競技人口の増加を図るものである。また、市民の誰もが立ち寄ることができる施設とすることは、スケートボードを含めたスポーツ振興には非常に重要なことであった。

3. 本施設の特徴

ここでは、本施設の主体を成す「パーク本体」とパークを含む「建築」について、その特徴を示す。

(1) パーク本体

最も大きな特徴は、屋内型のスケートパークとしては日本最大級の規模を誇ることである。

コースの構成は、発注者のほか地元のスケートボード協会から意見聴取し、様々な競技・トレーニングができるものを目指した。その結果、オリンピックの種目となっている「ストリート」と「パーク」の2つをコースとして導入することとした。

建築面積に限りがあり、すべてのコースを国際競技レベルとすることは困難であったことから、「パーク」は国際競技レベルの規模を確保し、「ストリート」は様々なレベルの競技者が十分

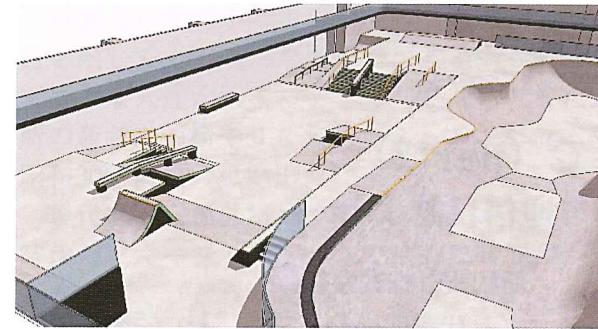


図-1 パーク本体イメージ

に楽しめる規模と難易度のセクションを用意した。

各セクションやエレメントは、スケートボードの本場であるアメリカ・カリフォルニアから、X-gameやワールドシリーズの会場設営の経験がある指導者を招き、助言を受けて国際競技レベルの規模・難度を有するパーク計画を行った。

(2) 建築

建築の規模は、自然公園条例の規制により2000㎡以下とする必要があり、おおよそ65m×30mの規模とした。パーク部分は、中に柱を設けられないため、長スパンの荷重に耐えうる構造とする必要があった。このため1階は強度の高いRC構造を採用した。一方、整備方針で掲げた主要産業である「林業」をPRする建築とするため、2階及び屋根は木造とし、大規模な木構造を象徴的に用いた建築とした。



図-2 内観イメージ

また近年、木の素材として注目されている、ひき板の繊維方向を直交するように積層接着した「CLT」(Cross Laminated Timber)を間仕切り壁や観客席に用いるものとした。

整備方針に掲げた「多目的利用」については、パークを設けるアリーナ以外のエリアで、1階にボルダリング、2階にジョギングコースとスラックラインができるスペースを設置し、多く

の利用者ニーズに対応できるものとした。



図-3 外観イメージ

4. 今後の課題

本業務で得られた課題を整理し、今後の整備および運営管理における考察を以下にまとめる。

(1) 施設の運営及び競技指導

施設を活用するためには、定期的なイベントや利用者拡大に向けた体験会などの開催が必要である。これを開催するためには指導者が必要であり、専門家や地元の協会と連携や管理体制への取り込みができるかが課題となる。

弊社が取り組んだ他のスケートパーク整備の事例では、地元のプレーヤーに計画段階から参画を依頼し、その後そのメンバーが主体となって協会が設立された。現在では協会が施設の管理者となり、スケートパークの運営を行っている。このようなスケートボードを知る地元管理者が運営に関わることで、イベント開催の企画や初心者への指導などが行われ、持続可能な運営体制が構築される。

(2) 技術指針及び競技基準

コース整備に関わる技術指針や競技基準は、現状では整っていない。2020年東京オリンピックより「ストリート」「パーク」の2種目が正式競技となったが、その競技方法や採点基準についてもまだ決定していない状況である。一定レベル以上の競技用スケートパークを整備する場合は、競技の難度と安全性を両立させるため、早期に基準を整備することが望まれる。

謝辞：本業務の遂行にあたり、村上市教育委員会生涯学習課のご指導・ご支援を賜り、職員の皆様に、心より感謝申し上げます。